

恩田陸「六番目の小夜子」論

— 小夜子とは誰なのか —

中川智寛

緒言

恩田陸「六番目の小夜子」は、恩田の実質的デビュー作として知られているが、少々複雑な発表過程を持っており、まず、それを指し示す作者恩田自身の言述を、以下に掲出する。

この本の、最後に書かれている文章を読んだ方は不思議に思われるかもしれない。

(原文(行空き))

この作品は、一九九二年七月に新潮文庫のファンタジー・ノベル・シリーズの一冊として発表され、その後大幅に加筆の上、九年八月に単行本として刊行されたものです。

(原文(行空き))

作者の私もこの文章を見て、月日の経つのは早いものだとちょっと感傷的になった。

最初に勤めていた会社を辞めて、三週間くらいで書いたこの小説が第三回ファンタジーノベル大賞の候補になり、酷評されてあっさり落選し、文庫として世に出たもののすぐに絶版になった。^①

恩田陸「六番目の小夜子」論

これをまとめると、次のようになる。

① 一九九二年七月初版、新潮文庫ファンタジーノベル・シリーズ『六番目の小夜子』（無署名の「あとがき」収録）

② 一九九八年八月初版、単行本『六番目の小夜子』

← (綾辻行人の「解説」収録)

③ 二〇〇一年二月初版、新潮文庫『六番目の小夜子』

← (恩田陸の「あとがき」と岡田幸四郎の「解説」収録)

二〇二三年三月現在で①と②は絶版であり、入手困難である。一般読者が通常の購買ルートで容易にアクセス可能なのは③である。因みに、①の「あとがき」と③の「あとがき」とは、別の内容である（本稿では、付記の通り、本文引用は②に依拠するものとする）。

①と③は同じ文庫版であるが、その間には、若干の異同がある。例えば、①の

秋は、同級生たちの観察（いわゆるマン・ウォッチングというやつだ）を趣味としていたから、^②。①「春」、傍線部は②・③にはなし

恩田陸「六番目の小夜子」論

「加藤くん？ ううん、全然。あたし、こないだはとつと帰ったもん。国道なんてべっこ」(②③では「反対」と表記)の方角じゃない」(春)

などであるが、内容読解には影響を及ぼさない程度であると考えられる。しかし、①は、「ファンタジーノベル・シリーズ」という名称、及びそのカバーデザインからして、若年層を读者ターゲットとしていたと考えられる。また、章の名称が、①は「春」・「夏」というようになっていゝのに対し、②③は「春の章」・「夏の章」となる相違もある。また、本作品が人口に膾炙する事になったきっかけとして、連続ドラマ化、舞台化が挙げられよう。

尚、小説「六番目の小夜子」には、後日談ならぬ前日談とも位置付けられる短篇「図書室の海」(二〇〇二年二月、新潮社刊・短篇集「図書室の海」収録)があり、「六番目の小夜子」の筋を知る読者から見れば、興味深い内容となっている。

綾辻行人は、「六番目の小夜子」の事を「魅力的なホラー小説」・「魅力的なミステリ」・「魅力的な学園小説」と評価し、他作品も含めて、「(略) 毎作趣向を変え、ひとつのジャンルの枠内に収まろうとしない。それでいてどれもが、静かで透明感のある『予感』に満ち満ちていて、読む者を幻惑し魅了するのである」と指摘している。

以下、綾辻のこの三定義に沿いつつ内容を再検討し、本稿なりの考察も加えて行きたいと思う。

I

綾辻は、この「ホラー小説」の事を、「(略)とりあえずここでは最も単純に「怖い小説」とだけ答えておくことにしよう」とし、恐怖・怖いという要素があれば、「ホラー小説」と呼んで問題ないという趣

旨の事を述べている。

「六番目の小夜子」という小説を支配する最大の要素の一つは、その怖さである。読者によっては、それこそ最大の読み所と見る者もあるだろう。

『六番目の小夜子』は、怖い。作者がどこまでそこを狙って書いたのかは分からない。あるいは「結果として」そうなってしまったのかもしれない。だが、ともかくにも読む者にこれほど心地よい「怖さ」を味わわせる力を持っているのだから、間違いなくこれはホラー小説なのである。

恐ろしい怪物が出てくるような話ではない。超常的な現象にしても、ほんのほめかし程度にしか描かれていない。死や暴力にまつわる凄惨な場面が頻出するわけでもなければ、狂的な悪意を持った人間が暗躍するわけでもない。それでもこの小説は、怖い。

綾辻は、同じ文章の中で、「六番目の小夜子」を「(略)ここ十年に発表された我が国のホラー小説の中でも、十本の指に入る傑作だと思ふ」と高く評価している。綾辻のこの言述には大筋で同意出来るのだが、その怖さというのは、言うまでもなく、作中で繰り広げられるサヨコ伝説の様態に、その原因を求める事が出来るだろう。

そのサヨコ伝説の本身は、関根秋と唐沢由紀夫との会話の中で、次のように示されていた。

「誰が始めたかよく分からないんだけどさ。三年毎に『サヨコ』になる者が出るってことだけで。俺の兄貴の代ときが三番目だったから、今年が六番目の年だってことだな」

「なんだよ、『サヨコになる』って」

「(略)その演し物が、その年はギリギリまで決まらなくて、校内

から募集したんだって。そしたら、匿名で、ボン、と芝居の台本が応募されてきたんだそうだ。それが『小夜子』という女の子の一人芝居だったんだね。これが、とても印象的な舞台だったらしいんだ。舞台の真ん中に教卓が置いてあって、上に真っ赤なバラの花が花瓶に活けてあって、その前で一人の少女が椅子に座って淡々と話をする、という設定なんだって」(『春の章』)

しかし、ホラーというなら、『春の章』の冒頭における、『彼女』と別の女生徒との「対決」の場面も、なかなか恐怖感を齎すものである。前者の存在には『』が付されている事から、勘の良い読者なら、あるいは、この者が男性の可能性もあるのではと、類推するだろう。恐らく、『彼女』とは加藤彰彦を、それと対峙する女生徒は津村沙世子を指しているであろう事が、後の展開からは読み取られる。

「小夜子」・「サヨコ」・「沙世子」という表記の書き分けについては、論文結末で改めて検討する事としたが、人事不省に陥った加藤彰彦の「ヒラミテ」とのうわ言が、加藤の親を介して関根秋に伝わり、それを「碑を見て」の意と解する事に成功した関根は、校庭の碑を見に行く。その、「十二年も前の碑」には、「一九××年 九月十六日 没／津村 沙世子 享年 十七」の文字があり(『春の章』)、関根は驚愕するが、恐らくこれには、読者の大半も驚くであろう。他ならぬ、この学校(校名は、小説作品中では記されていない)に転校して来たばかりで、以降も作品展開の中で大きな役割を果たす津村沙世子と、漢字表記も含めて同姓同名だからである。

関根は「戻ってきたんだ」(傍点原文)と呆然とするが、「戻ってきた」とは、交通事故で死亡したはずの津村沙世子(碑に記されている方)が、登場人物としての津村沙世子(神戸から転校して来た方)として、いわば転生したのではないかとの関根の思いと共に、小説表題である「六番目の小夜子」とも、深く関わる。「演し物」は「三年毎」であり、今

恩田陸「六番目の小夜子」論

年が六番目。つまり、小説内で躍動する津村沙世子がまさに生誕した頃に、この学校でサヨコ伝説が発生したのだと計算出来るからである。後者の津村沙世子は、この学校の三年振りの騒ぎに関与する為に、わざわざ転校して来たのだと、作中事実は告げている。

また、ホラーといえば、後述の「学校」という要素とも深く関わるものの、「秋の章」における群読の場面は、読者に著しい恐怖感を齎すであろうと同時に、この作品の圧巻でもある。時折、太文字を用いて(①)(②)に共通である)、群衆心理の効果を存分に駆使しつつ、しかし、後の設楽の述懐を信するならば、あるいは、設楽の意図していたものをも超えて、この群読場面は進行して行った事になる。そして、群読としての物語は結末を迎える事は出来ず、竜巻という現象によって、中断を余儀なくされる。

II

綾辻は、冒頭の「プロローグ」について、「略 江戸川乱歩の『月と手袋』で扱われていることでも有名な、いわゆる『マーダー・ゲーム』の変形ヴァージョンである」とした上で、「六番目の小夜子」が「魅力的なミステリでもある」理由の一つとして、「交錯する複数の謎のうち、あるものは物語の途中で、あるものは結末に至って意外な解決を見る。が、必ずしもすべてが明確に説明し尽くされるわけではない。すべてを説明するのが本格ミステリの常道だけれども、この作品の場合には、そうではないことが見事な効果を上げている」と指摘している。

綾辻のこの言は恐らく正しく、小説「六番目の小夜子」が読後にただならぬ気配を読者側に残すのも、これに起因していると言って良いであろう。では、どのような謎が「説明し尽くされていない」のか、検証してみたい。稿者の私見が多分に入る恐れはあるものの、以下に

挙げてみる。

1 伝説としての「サヨコ」と、転校生津村沙世子の名前の音の一致は、果たして偶然か(「結語」でも触れる)。

この問いを深く掘り下げて行くのが関根秋であり、「例えば、津村沙世子と二番目のサヨコに繋がりがあるといふ可能性もあるのではないか?」(「冬の章」)との仮説も立て、また、「それとも、もしかして、本当にサヨコはいるの、だろ、う、か?」(同、傍点原文)との疑問にも突き当たるが、その後の展開により、この問いもほぼ無効化される。

2 津村沙世子が、卒業式において、鍵を下級生に渡すが、「手紙の送付」は、誰が担うのか。

3 仮に、日本史教師・黒川が「2」に関与していたとしても(黒川は、生徒の個人情報を知り得る立場であろうから)、黒川は、誰に鍵が渡ったかという事を、どのようにして察知出来るのか。

4 犬の問題。津村沙世子が地元の不良少年に絡まれた際には、犬達は、沙世子を救う活躍をしたが、部屋棟が火事になった時には、沙世子の指示に従う様子を見せなかった。この差異を、どのように解釈すれば良いのか。因みに、犬は、不良少年の場面が初見ではなく、「春の章」の中盤、関根と唐沢が「サヨコ」に関する話をしていた時にも、犬が二匹現れる。これら三場面の犬達が同一かどうか、分からない。

5 「春の章」序盤の、チューリップの花を教室の入口に留めたのは誰か。黒川か。

6 「3」に関連して、作中で度々匂わされているように、黒川教員が一連の「サヨコ騒動」に深く関与していたとして、公立学校では人事異動があるであろうから、その時は、黒川はこの「サヨコ」の慣習をどうするつもりだったのか。自動的にやめるつもり

だったのか。

ざっと思い付くだけでも、これだけ挙げ得る。綾辻の指摘に「大筋で」同意出来ると思述べたのは、綾辻が「恐ろしい怪物が出てくるような話ではない」と述べているのに対し、「4」の問題があるからで、これは、受け取り方によっては、「怪物」的な要素とも解釈され得るからでもある。

この小説における「ホラー」的要素と「ミステリ」的要素とは、きれいに弁別出来るものではなく、むしろ、相互に影響し合っているからこそ効果的なのであるが、作品の主題やタイトルと関わって概要なのは、やはり「1」の問題であるだろう。

「春の章」後半の、加藤彰彦(先述のように、この場面では「彼女」と表記されている)と津村沙世子との、対決の箇所。

「——でも、そんなこと現実にあるわけじゃないじゃない。馬鹿馬鹿しい。しよせんあたしたちは偉そうなこと言ってもただの子供で、親の都合で学校をかわるだけ。新しい学校に行くのが怖くて怖くて、嫌で嫌でたまらなくて、永遠に新学期が来なければいいと布団の中でびくびくして——そんな目的だの悪意だのを持って、自分の意思で転校なんてできるわけじゃないじゃない。ねえ? あたしがそんなに怖く見える? どう? 加藤くん」

『彼女』は——いや、加藤彰彦は名前を呼ばれて我に返り、その場に立ち尽くした。

津村沙世子はいつものまにか加藤の方に向き直り、両手で身体の前にかバンを持って超然と目の前に立っていた。

(中略)

少女はいたって落ち着き払って前を歩いている。

引用部では、『彼女』の正体が男子生徒の加藤彰彦である事が示されるが、あるいはそれより興味深いのは、津村沙世子が転校を「自分の意思で」はないと決然と言いつち、そして、小説内での呼称が「少女」へと変化している点である。津村沙世子が、自身の名前でもなく、「サヨコ」でもない誰かへと脱皮する時。その瞬間が、「少女」という呼び名の中にとらえられているのではないか。

津村沙世子は、本音は見えにくいながら、「あたしはね、置いてきぼりが嫌なのよ」(「冬の章」)と語る箇所があり、これは、伝説の中の「サヨコ」が、更に津村沙世子の感情の中に流入していると、読めなくもない。

群読の終盤で、竜巻が起るシーンの、設楽の視点からの描写。

そして、彼は自分の目を疑った。

そこには、五人の人間の他に、六人目の人間の足が照らし出されてきた。スラリとした女の子の足が。

彼らはその瞬間、ボーリングのピンのようにきれいに並んでいた。設楽がキャストとして用意した五人以外の、六番目の少女が立っているのを、彼は確かに見たのである。(「秋の章」)

しばらく後の箇所、花宮雅子は、この時に、それまで隣にいたはずの津村沙世子が一時いなくなっていた事を想起する。従って、この「六番目の少女」が津村沙世子である可能性も匂わされているのだが、これも、決定的な答えは、作中からは得られない。

そもそも、この「六番目の小夜子」という小説は、主人公が一体誰なのか、見定めにくい。「春の章」冒頭は、『彼女』の視点から語られる。「彼女」は、先述のように、男子生徒・加藤彰彦である事が、事後的に明らかにされる。「夏の章」は、関根秋を視点人物として起発される。「秋の章」は、学園祭実行委員長である設楽正浩の視点から

始まる。「冬の章」は、最初は受験期の学校全般に関する記述があり、その後、唐沢由紀夫と花宮雅子との会話に移行し、その後、関根秋の視点が支配的となる。同じ章の中でも、視点人物は頻繁に入れ替わる。また、例えば、「しかし、沙世子が美香子の中身をどんどん引き出しては二人のあいだにさらけだしているのに比べ、沙世子の方はほとんど何も美香子に見せていない、ということに美香子は全く気が付いていなかった」(「冬の章」)のような、超越的視点の語りも、しばしば用いられている。

全体的に見ると、花宮雅子が主人公であるかにも思えるが、関根秋の視点はかなり支配的な箇所も多く、やはり定め難いと言えるだろう。あるいは、主人公の確定性自体は、小説「六番目の小夜子」においてはさほど大きな問題ではなく、学校の構成員たる雅子・秋・由紀夫、そして津村沙世子が代代的に視点人物的役割を負う事により、多視点の物語となり、特定の主要人物への感情移入が回避されているようにも見える。

III

学校という舞台を考える上で興味深いのは、この「六番目の小夜子」について触れた者の多くが、非生物であるはずの学校を、主要登場人物の一人であるかのように数え上げている事である。

サヨコとは「学校」によって選ばれ、「学校」のために奉仕する存在なのである。サヨコはこの空間を攪乱し、活性化させ、ガス抜きをおこなう。サヨコはこの学校で、すでに伝説と化している。例えば、二番目のサヨコ。転入してきた彼女は頭が良くて、活発だった。しかし彼女は、役が決まった月曜日に登校しなかった。週末に自動車事故で、両親とともに死亡していたのだ。『サヨコ』

恩田陸「六番目の小夜子」論

の上演は中止となった。この年の大学合格率は、史上最低を記録したという。

サヨコという伝説を生かし続けるのに、学校ほど適した空間はない。(中略)九十年代の「学校の怪談」ブームのなか、ウワサの特異な伝播の場として学校が注目された所以である。

この作品が「略」友情、学校、作中劇、ホラー風味、ミステリ要素、ノスタルジックな世界と、恩田陸を語る上で欠かせないキーワードが全て封じ込まれている」と評されるのもっともな所だが、それらの要素が全て有機的に繋がっていると言えるのである。

一柳の指摘はとても有用なものであるが、津村沙世子が作中で重要な役回りを果たしているという事と、学校——サヨコが果たして従属関係であるかどうかという事とは、別個に検討されなければならない事柄であろう。

学校という舞台がノスタルジー性を帯びて読者の前に現出されるのは、この小説の語られ方にも要因がある。「どっかで聞いたような話だな」(春の章)、「設楽はその時、何となく舞台の上を振り返った。あとで考えてみてもなぜだか分からなかった」(秋の章、群読の場面)などの、後置的な語りがそれである。そして、「窃盗未遂事件」の後の片付けの場面の、「しかし、そのざわめきの中に、一種の興奮を、ある種の期待を、感じとるのは間違いだらうか?」(春の章)などの言辞も、それに当該しよう。

綾辻は「略」彼らの高校生活最後の一年間が生き生きと描かれているわけだが、その描かれ方に、僕は何とも云えぬ愛おしさや切なさを感じてしまう」と吐露しているが、これは、作中に「なんとという、ゆったりとした、いとおいしい時間なんだろう」(春の章)などの記述が所々にあるのと、関係していよう。この「六番目の小夜子」に限らないが、多くの恩田作品は、読者が「学校」に対して抱く複雑な思念を揺さぶっ

て止まないものである。「学校は、だから、この物語の決して顕在化しないもうひとりの主人公でもある」との指摘が首肯される所以だが、それを示す箇所、即ち学校について書かれている箇所をいくつか示す。

朝の学校は、なぜすべての罪を忘れたかのように新しいのだろう、と『彼女』は思った。(春の章)

何も余計なことを考えなくても、どんな長時間は過ぎてゆく。

第一回目の進路相談会。運動会。中間テスト。

学校というものは、そういったシビアなものと、牧歌的な儀式とを、同じレベルで交互に平然と消化していく。淡々とこなされていく行事のあいだに、自分たちの将来や人生が少しずつ定められ、枝分かれしていつにいつに生徒たちは気付かないのだ。(春の章)

「——つまりな、学校というのは回っているコマのようなものなんだな。いつも、同じ位置で、まっすぐ立ってくるくる回っている。で、おまえら生徒がヒモを持って、コマを一生懸命バシバシ叩いて、コマが失速して倒れないように努力するわけだ。そして、ヒモをどんどん後輩に渡して行って、次々と別の生徒がコマを叩く。コマはずっと同じ一つのコマだけど、ヒモを持つ人間、叩く人間がどんどん変わっていくわけだな。(以下略)」「冬の章、黒川の発話)

しかし、いずれも、不思議に登場人物の卑小さを示すものとは機能しておらず、むしろ逆に、これらの言辞によって、各主要人物の位置は明確化されているだろう。

この一連の「サヨコ騒動」や群読劇が成立するのには、学校という

舞台が好適であった事、むしろ、学校でなければ成り立たなかったという事は首肯されるのだが、「六番目の小夜子」に描かれる学校空間は、断片的な描写ではあるものの、読者側に悪印象を抱かせないように描かれていると言える。

結語

再び、この小説のタイトルに舞い戻って考えてみる。

「六番目の小夜子」。この「小夜子」という表記が用いられているのは、物語内では、実はごく僅かなのである。「I」節後半で稿者が挙げた引用を見て頂きたい。ここに「『小夜子』とある（因みに、この箇所は、①のバージョンでは「小夜子」の表記には変化しないものの、「I」ではなく、¹が用いられている）。この後、関根秋と唐沢由紀夫との会話の中で、「要するに、その『小夜子』という女の子の出でくる芝居をやった年は、大合格率が非常に良かったというんだ」、「その子は演劇にも興味があつたらしくて、この『小夜子』の役を自分がやりたいと申し出た」（以上いずれも「春の章」、前後の発話は省略、そして、「冬の章」の冒頭部分で、関根秋が設案に対して、未完に終わった群読の帰趨を尋ねる場面において、何回か『六番目の小夜子』という表現が使われている）。

つまり、「小夜子」という漢字表記で表されている人物は、劇のタイトルとして、あるいは、劇中の登場人物としてだけ有効性を持っており、言わば、「小説内劇」の人物名として用いられているのみである。「こんなゲームを御存知であろうか。」との語句で始まる、これも十分に恐怖感を提供する「プロログ」においてさえ、用いられているのは「サヨコ」の表記であり、思うに、このカタカナ表記の「サヨコ」は、皆の噂や伝聞が混入した結果のものとして、使用されていないだろうか。数例を挙げた関根秋と唐沢由紀夫の会話の中では、「小

夜子」表記と「サヨコ」表記とが混在しているが、この事も、その「噂」の媒介性を傍証していると言えるだろう。

しかし、更に言えば、会話している当の関根秋や唐沢由紀夫らが、漢字表記の「小夜子」やカタカナ表記の「サヨコ」との区別を、それ程意識して喋っているとは、あまり考えられない。彼らでさえ、混同させながら話しているのかも知れない。小説を活字で読む、読者向けの書き分けであるとも解せる。小説内で会話している関根や唐沢も、そして、恐らくは花宮雅子も、「サヨコ伝説」の「サヨコ」と発話する際に、転校生としてやって来た津村沙世子の存在性とを多分にダブらせながら、発音しているだろう。

小谷真理は、本作の読み所について、「現実感がペロリとむけて、その向こう側に何かが見えてくる。それは、学校という日常空間のなかに投げ込まれた得体のしれない、奇妙な何かの原因だった——『六番目の小夜子』の絶好の読みどころとは、この外部からの異人の違和感をもって、内部の異空間性が暴かれていく過程にあった」と指摘している。「外部からの異人」とは、津村沙世子の事を指しているのである。小谷の指摘は鋭いものだが、本作を一読した者であれば分かる通り、津村沙世子は、異彩を放ちながらも、この学校空間に溶け込んで行っている。

先述のように、「沙世子」という表記さえも、この転校生である津村沙世子と、交通事故で死去したという「沙世子」の二通りの存在があり、その重複の要因に対しても、作品は明確な答えを用意していない。小説表題の「小夜子」とは誰なのかという問題は、群読場面の壇上の「六番目の少女」が津村沙世子であったのかどうかという問いと共に、ある意味で、読者側に放擲されたままである。

作者恩田は「緒言」で述べたように無署名だが、恐らく恩田によるものだと思う。①の文庫版「あとがき」の中で、

恩田陸「六番目の小夜子」論

そしてその時、そこにもう一人、誰かがあなたの隣りに座っていることに気がつくのだ。

あなたが忘れていた誰か、あなたがかつてよく知っていた誰か、そしてあなたのことを誰よりもよく知っている誰かが。

と書いている。恩田がここで書く「誰か」に、「小夜子」・「サヨコ」の複数は収斂されて行くのか。劇の題名としての、そして小説内劇の登場人物としての「小夜子」は、そのような読者の反復的な問いと反趣の中で、恐らくは、永遠に生き続ける。

注

(1) 恩田陸「あとがき」(二〇〇一年二月、新潮文庫版『六番目の小夜子』所収)。

また、恩田陸「『サヨコ』縁起」(一九九九年三月、「ホラーウェイブ02」所収、ぶんか社)は、②刊行に際して発表された文章だが、再刊の経緯がより詳細に書かれていて興味深い。①絶版の後に複数社から文庫化の話があったと明かされている他、「『サヨコ』は、最初に降ってきた時から私のもではなく、すべて読者によってここまで運ばれてきたという感じが強い」との感懐も述べられている。また、②刊行の際の改稿にも触れている。

(2) 二〇〇〇年四月八日から六月二十四日に掛けて、NHK教育テレビ(当時)、「ドラマ愛の詩」の枠で放送され、全十二回。

その後も、何回か再放送されている。DVD化も行われている。当然の事ながら、登場人物名や設定に関しては、原作からはいくらか変えられている。鈴木杏、栗山千明、松本まりか、山田孝之などが出演している。脚本は宮村優子。

(3) 二〇二二年一月七日から一月十六日まで、新国立劇場・小劇

場で開催された。鈴木絢音、尾碇真花、高橋健介らが出演している。総監督は鶴田法男、脚本は小林雄次、演出は井上テテ。

(4) 綾辻行人「解説」(一九九八年八月、単行本『六番目の小夜子』所収)。

(5) 先掲(4)綾辻行人。

(6) 先掲(4)綾辻行人。

(7) 一柳廣孝「生きている『学校』——『六番目の小夜子』——」(二〇二二年二月、「現代女性作家読本⑩ 恩田陸」所収、鼎書房)。

(8) 藤田香織「『六番目の小夜子』」(二〇〇七年一月、「文藝」巻号)。

石井千湖・北村浩子・千街晶之・藤田香織・吉田大助「恩田陸全著作解題」の中の当該項目。

(9) 先掲(4)綾辻行人。

(10) 岡田幸四郎「解説」(二〇〇一年二月、新潮文庫版『六番目の小夜子』所収)。

(11) 小谷真理「解説——夢の地理学のために」(一九九九年二月、新潮文庫版・恩田陸「球形の季節」所収)。

(12) 無署名「あとがき」(一九九二年七月、新潮文庫ファンタジー・ノベルシリーズ版『六番目の小夜子』所収)。

※ 小説「六番目の小夜子」の引用に際しては、特に注記したものを除き、単行本『六番目の小夜子』(一九九八年八月、新潮社)収録の本文によった。引用に際し、ルビは原則として省略した。

プロフィール

東海学園大学人文学部准教授。日本近現代文学。主要論文に「澤田瞳子「若冲」論——創造、模倣、そして生命の形象——」(二〇一七年一月、「福井大学教育・人文社会系部門紀要」一)号)などがある。